

世襲戦隊カゾクマン

作／田村孝裕

登場人物

一郎 (父レッド) 山口良一
多津子 (母ピンク) 熊谷真実
大輝 (兄ブルー) 曾世海司
紗江 (妹イエロー) 梨澤慧以子
正則 (婿グリーン) 芋洗坂係長
詩織 (大輝の妻) 上田桃子
柴原 (司令官補佐) 岡田達也
虎美 (ミドラー) 西山水木

舞台全面に5枚の幕が降りている。

上手からピンク、ブルー、レッド、イエロー、グリーン。

戦隊ヒーロー風のオーブニング曲が流れる。

幕が一斉に上がるとそこには父レッド、母ピンク、兄ブルー、妹イエロー、婿グリーンが並び立ち、格好良い決めポーズ。

レッド 父レッド！

ピンク 母ピンク！

ブルー 兄ブルー！

イエロー 妹イエロー！

グリーン 婿グリーン！

レッド 五人揃って！

カゾクマン（決めポーズ）カゾクマン！

五人はマイクを拾い歌い始める。

皆 家族って何だ

世襲って何だ

それは繋がるってことさ

守りつづけるってことさ

世襲戦隊カゾクマン

レッド 赤い炬燵が家族を暖め

ブルー 青い湯船が身体を癒す

イエロー 黄色いカレーがお腹を満たし

グリーン 緑の野菜でバランス取るのさ

ピンク （台詞）あとは桃色の愛があれば……大丈夫

皆 家族って何だ

世襲って何だ

歌の途中で大きな爆発音。

カゾクマン、ダメージを受けた様子。

レッド き、汚いぞ！ミドラー！

おどろおどろしい音楽とともに、敵であるミドラーが登場。

ミドラー フッフッフ……とんだ戯言ね。お前たちがバカなだけでしょう？大体なぜ戦いの最中（さいちゆう）に自己紹介するの？なぜ勝負の最中（さなか）に歌うの？ここは戦場なのよ！

ピンク （幕が上がり）そういう契約なの！それに、歌の最中には攻撃しない約束だったはずよ！

ミドラー 約束？そんなものを交わした覚えはないね。

イエロー （幕が上がり）とぼけないで！最低限のルールは守りなさいよ！ルールを守る悪の組織なんて聞いてことないわ！

レッド （幕が上がり）くっそー……こうなったら うっ！（ギックリ腰）

ピンク レッド？！大丈夫？！

グリーン （幕が上がり）お義父さん！大丈夫ですか？！

レッド ここでは「レッド」と呼ぶんだ、正則くん……。

グリーン す、すみません！つい……。

ピンク あなたも「グリーン」と呼ばなくちゃ！

レッド し、しまった……（また腰を押さえ）イタタタ……。

ミドラー まだ腰痛が治らないようね、レッド。さあ！やっっておしまい！

幕が下りると、ショッカー風の手下が上空から現れる。

バトル風の音楽。

ブルー ここは俺に任せろ！

手下たちが兄ブルーに襲いかかる。

華麗な身のこなしで手下たちを攻撃する兄ブルー。

ブルー グリーン！そっちを頼む！

ブルーと入れ違いに婿グリーンが登場。

グリーン アイアイサー！

ダンサブルに手下を倒していく婿グリーン。すると徐々に体力を消耗し……。

グリーン ママ……いやイエロー……助けて……。

息切れしながら去るグリーン。そこへ妹イエローが登場。

イエロー もう！しょうがないんだから！

手下たちをバンバン突き飛ばしていく妹イエロー。ここへ携帯電話が鳴るとそれに出る妹イエロー。

イエロー はい、もしもし。

ピンクが慌ててやってくる。

ピンク 今、出てる場合？！

イエロー 倫太郎の幼稚園からなのよ！お母さん！あとお願い！

ピンク お願いじゃないわよ！

電話を手に立ち去る妹イエロー。

ピンク こうなったら一気に決着つけてあげるわ！

母ピンクはバズーカを手にするとそれを敵陣に構えて、

ピンク 発射！

放たれるバズーカ。しかしその弾道はあらぬ方向に飛んでいき、民家を破壊してしまう映像が映し出される。

ピンク ごめんなさい！！

幕が上がる。

レッド バズーカはよせと言っただろう！君の老眼じゃ狙いが定まらない！

母ピンク、兄ブルー、婿グリーンが父レッドの元へ駆け寄る。

ミドラー (声) ハッハッハー！今日こそ我がミドラー一族の恨みを晴らす時が来たようね……覚悟しなさい！カゾクマン！

あたりに轟音が鳴り響く。

レッド ま、まずい！

ひるむカゾクマン。

そこへ上空から数台のヘリコプターの音がする。

ピンク あれは……自衛隊の皆さんだわ！

グリーン (手を振り) おーい！こっちです！助けてください！

などと、カゾクマン全力で助けを求める。

ミドラー (声) もう少しだったのに……皆のもの！退散よ！退散！

暗転……。

明転するとそこは一軒家の居間。
 畳に座卓、あとは父の腰痛のためか、マッサージチェアが一台
 居間の隅に置かれている。上手側には縁側と小さな庭、その塀
 はロボットの顔のように見える。下手側には寝室へと通じる襖。
 居間の奥は廊下になっていて台所への出入り口と、トイレの扉
 が見えている。廊下を上手に進むと洗面所や風呂、下手に進む
 と玄関や階段があるようだが双方ともここからは見えない。

夕方。薄暗い室内。

少しして玄関の引き戸が開く音がする。
 母ピンクの格好をしたまま部屋に入ってくる多津子。すぐさま
 台所へ行くと。ペットボトルの水を用意。それから居間の明かり
 をつけると、茶箆筒から痛み止めの薬を探す。

大輝 (声) 一気に上げよう。せーの！

一郎 (声) イタタタタ！

正則 (声) 大丈夫ですか？！お義父さん！

紗江 (声) 靴脱がすわよ！ちよつと我慢してね！

一郎 (声) イタタタタ！……イタタタタ！

紗江 (声) 脱げた！脱げた！

大輝 (声) ゆっくり行こう！ゆっくり！

正則 (声) はい！

少しして一郎に肩を貸しながら入ってくる大輝と正則。
 後ろから一郎を心配そうに見つめる紗江も入ってくる。
 皆、カゾクマンの姿である。

一郎 みんなすまん……今日は、俺の責任だ……。

正則 仕方ないですよ。長年の疲れが腰にきてるんですから。

大輝 横になるか？

一郎 いや。マッサージチェアに座らせてくれ。

大輝と正則は一郎をマッサージチェアに座らせる。
と、すぐさま多津子が水と薬を手渡す。

多津子 お父さん。痛み止め。

一郎 (受け取って) ありがとう。(と痛み止めを飲む)

紗江 警察もケチよね。パトカーで送ってくれればいいのに。

多津子 交渉はしたのよ。そしたら「パトカーは送迎車じゃありませんから」
って。

紗江 ああ、ほんと……。

多津子 昔は協力的だったのよ。車、車検に出してるときなんか、パトカーで
現場まで連れてってくれたんだから。

紗江 へー。良い時代だね。

多津子 そう。今とは大違いよ。

紗江 ところでさ、何でウチの代車がワゴンRなわけ？あれ4人乗りでし
よ？

大輝 しょうがないだろ。ほか出払ってるっていうんだから。

紗江 ミドラーちよつと笑ってたよ。お兄ちゃんがママチャリで登場した
とき。

大輝 あの辺り混むし、駅からも遠いから自転車が一番早いと思ったんだ。

正則 実際、早かったですよ、お義兄さん。あの辺、坂多いのに。

大輝 ほんとにキツかったよ、あの坂は。

大輝の携帯にメールの着信。

紗江 ねえ。電動自転車、経費で落ちないかな？倫太郎乗せるのに楽だしさ。

多津子 無理よ。落ちるわけないでしょ。

紗江 でもマッサージチェアはイケたんじゃ？

多津子 それはお父さんの身体のケアなもの。

紗江 えー。買っちゃおうよお。幼稚園のママ友なんてみんな持ってるし、
母さんだって買い物すごい楽になるんだしさ。

多津子 そりゃあたしだって欲しいけど。

一郎 我慢なさい。ただでさえ今は世間の風当たりが強いんだぞ。

紗江

(不満だが) ……はーい。

多津子はスマホを見ている大輝に、

多津子

大輝。もうヤフーニュースに載ってる？

大輝

ああ。

多津子

なんて？

大輝

「カゾクマン また自衛隊に救出される」

多津子

そう……。

大輝

もうひとつあるよ。

多津子

ええ?! もうひとつ?!

大輝

「父レッド 腰痛治らず引退危機か」

一郎

……。

多津子

……。

正則

……そんなの、マスコミが決めることじゃないですよ。

一郎

いや、その通りかもしれないな。ここまま続けたって、みんなの足を引っ張るだけだ。

正則

お義父さんがやめたら、もう一人は誰が……？

紗江

詩織さんがいるじゃない。

多津子

詩織ちゃんには無理よ。あの子にピンク譲る気はないわ。

紗江

母さん……。

多津子

今日だって、どうして家を空けられるの? あたしたちが戦ってる間に

何で同窓会なんて行けるの?

大輝

俺が「いい」って言ったんだよ。

多津子

だったら大輝にも問題がある。レッドを継ぐ者として失格よ。

大輝

……。

多津子

お父さんはまだまだ引退なんてしません。今、引退されたら何のために

にマッサージチェア買ったのか、わからないわ。

沈黙……。

紗江

……とりあえず着替えて一服しよう。ね?

多津子

そうね。あたしも着替えちゃおう。

紗江は立ち上がると着替えに二階へ。

多津子は寝室へと向かう。

大輝

今日のことは母さんだつて了解してたじゃないか。

多津子

了解なんて、した覚えはない。

大輝

詩織が母さんに黙って、同窓会に行くと思うか？

多津子

同窓会なんて、聞いた覚えがない。

大輝

話してたよ、確実に。俺もその場にいた。

多津子

いつ？

大輝

先週だよ。母さんが韓国ドラマ見てたとき。

多津子

あのね、ドラマ見てるときに話されたってこっちは聞いてるわけないでしょ！

睨み合いの中、多津子は寝室へと去る。

一郎

……俺も見たよ。詩織ちゃんが母さんに話してるところ。

正則

僕も、聞いてました。

大輝

本当は覚えてるんだよ。母さんはただ、詩織のことをいびりたいたけなんだ。

正則

まあまあ。お義兄さん。

一郎

いいや。覚えてないと思うぞ。韓国ドラマ見てるときは俺もよく無視されるからな。

大輝

いいや。母さんは絶対に覚えてるよ。

大輝はふてくされた様子で、二階へと去る。

一郎

イテテテ……。

正則

(マッサージチェアの)電源入れましようか？

一郎

いや、いい。ここだけの話、揉み返しがすごいんだ。このマッサージチェア。

正則 そうなんですか?! 40万もしたのに?!
一郎 機能が良すぎて俺の身体には合わないらしい。
正則 返品したらいいじゃないですか。
一郎 母さんが気に入って使ってるから。そもそも、このマッサージチェアを選んだのも、母さんだしさ。
正則 そっか……そうですよね……。

——ここへ着替えた紗江が寝室から出てくる。

一郎 そういえば、何だったんだ? さっきの電話。
紗江 倫太郎、今日お泊り会なのよ。
一郎 ああ、知ってるよ。
紗江 なんか「帰りたい」とか言って泣き出したらしくって。
一郎 またケンカでもしたのか?
紗江 そうみたい。
一郎 良いのか? 倫太郎のとこ行かなくて。
紗江 あたしもそう思っただけけど、この人が「行かなくていい」って。
一郎 えっ?
正則 子供のケンカに親が口挟むのもなんですから。
一郎 そうかもしれないけど、様子見に行くくらいはした方がいいんじゃないか?
紗江 そういう考え方が「甘い」んだって。
一郎 甘いつて……?
正則 僕は、倫太郎に強くなつてほしいんです。いずれは「カゾクマン」を継がなきゃなりませんし。
一郎 そんなの、まだまだ先の話じゃないか。
正則 わかってます。でも今のところ、跡継ぎは倫太郎だけですから。
一郎 まあ、そうだけどさ……。
紗江 てか時代錯誤よね、世襲なんて。はっきり言って、倫太郎が跡継ぐ頃まで、父さんの体力が持つとは思えないよ。
一郎 正直、俺もそう思う……。
紗江 詩織さんだって可哀想だよ。跡継ぎが出来ないからって、ネットであ

んなに叩かれて。

着替えた多津子が一郎の部屋着を手に戻ってくる。

多津子

だからって同好会に行っていないことにはならないでしょ。

紗江

別に、そんなこと言っていないじゃん。

多津子

あたしはね、心構えのことを言ってるの。詩織ちゃんにはカゾクマンの家に嫁いだ自覚が足りないのよ。

皆

……………

多津子

着替えられる？

一郎

ああ。起こしてくれるか。

三人はやいのやいの揉めながら、一郎を着替えさせる。

一郎

ありがとう。あとは自分やるから。

と、上着を着る一郎。紗江は台所へ。

ここへ着替えた大輝が戻ってくる。

多津子

ねえ。詩織ちゃん、いつ帰ってくるの？

大輝

まだ帰らないよ。今日はゆっくりしてこいって言ってあるから。

多津子

あたしだったらすぐ帰ってくるけどね。ミドラーが現れた時点で。

大輝

詩織だってわかってる。さつきも「帰る」ってメールがあったんだ。

多津子

あたしに言わせればメールしてる時点でダメよ。あんたに「帰らなくていい」って言わせるためのメールなんだから。

大輝

詩織はそんな女じゃないよ。

多津子

あんたにとってはね。でも母さんにそうは映ってないの。

一郎

誰か、ズボン取ってくれるか。

多津子

ほんと自覚がなさすぎる。普通の家に嫁いで来たわけじゃないのよ。

大輝

そんなことは百も承知だよ。

一郎

正則くん、ズボン取ってくれ。

多津子

だとしたら同窓会なんか断って、家にいるべきじゃない？（正則に）

そう思うでしょ？

正則 ああ、そう、ですね……。

多津子 ほら。正則くんだってこう言ってるじゃない。

正則 あ、いや、そういう意味じゃないんですけど……。

一郎 正則くん、ズボン。

多津子 じゃあどう意味よ？

正則 えっ？

大輝 どういう意味なんですか？

正則 えっと……僕ちよつと、着替えてきます。

正則は逃げるように二階へ。

一郎 正則くん？

多津子 今日だって夕飯どうするの？戦い疲れたあたしたちに今から作れつて言うの？

ここへお盆にお茶を乗せ、紗江が台所から出てくる。

紗江 おでんあったよ。

多津子 おでん？

紗江 詩織さんが作つといてくれたんでしょ。

多津子 おでんなんて夕飯にならないわよ。大体ご飯のおかずにならないじゃない。

一郎 俺が食べたいって言ったんだよ。(予報で)今晚は冷え込むからって。ブリ大根も作ってあったよ。母さんに気使ってくれたんじゃない？煮物と煮物って……どんなセンスしてるのよ。

一郎 母さん、ズボン。

多津子 はいはい。(ズボン取りに)

紗江 大根使い切りたかったんでしょ。母さんいっぱい買ってきちゃったから。

多津子 (ズボンを忘れ)だって一本20円よ。そんなチャンス滅多にないもん。

紗江 だからってあれは買いすぎよ。

多津子 だとしても煮物ばかりにする？大根サラダでいいでしょ。

紗江 おでんとサラダじゃ合わない？

多津子 ブリ大根とサラダでいいじゃない。

大輝 親父が「おでん食べたい」って言ったんだろう？

一郎 言った。大輝。ズボン。

大輝 ああ。(ズボンを取りに)

多津子 何遍も言わせないで。おでんはご飯のおかずにならないの。

大輝 (ズボンを忘れ) それ母さんだけだろ？俺はおかずになるよ。

紗江 もういいじゃないのよ。母さんにはブリ大根があるんだから。

多津子 同じ大根なら、あたしはおでんの方が好きなの。

一郎 紗江、ズボン。

紗江 ん。(ズボンを取りに)

大輝 だったら最初からおでんだけで良かったじゃないか。

多津子 それじゃおかずにならないって言ってるでしょ。

大輝 (座卓をバン！と叩き) じゃあどうすれば良かったんだ？！

多津子 ブリ大根と大根サラダにすれば良かったのよ！

一郎 (紗江に) おい、ズボン。

紗江 (ズボンを忘れ) もうやめてよ！

一郎 え……俺？

紗江 (多津子と大輝に) そんなくだらないことで大声出さないでよ！

多津子 くだらないってなによ？！

紗江 くだらないでしょ！おでんもブリ大根も両方あるんだからいいじゃない！

多津子 両方あるのが問題だって言ってるの！煮物ばかりで！

一郎 寒いんだ！ズボンをくれ！

大輝 何が問題だよ？！何かに託けて詩織に文句言いたいだけじゃないか！

多津子 文句だって言いたくなるわよ！

室内に壮大な音楽が鳴り響くとともに、塀の上部にある球体が煌煌と光る。

一郎 司令官に敬礼！

皆 ハッ！（ポージング）

一郎 （ポージングで腰を痛める）

司令官 （声）カゾクマン諸君。ケンカはよしなさい。

多津子 すみません！お見苦しいところを……。

司令官 （声）レッド。

一郎 はい。

司令官 （声）早くズボンを履きなさい。

一郎 はい。申し訳ありません……。

多津子が一郎にズボンを履かせてやる。

多津子 （小声で）もう、なにやってんのよ。恥ずかしいったらありやしない。

司令官 （声）ピンク。

多津子 はい。

司令官 （声）おでんはご飯のおかずにはならない。私も同じ意見だ。

多津子 そうですね？なりませんよね。

司令官 （声）しかし立派な夕食にはなる。贅沢言わないで食しなさい。

多津子 はい。申し訳ありません……。

司令官 （声）ブルー。

大輝 はい。

司令官 （声）君が現場に止めた自転車は駐輪禁止区域だ。今後自転車は駐輪

場に止めるように。

大輝 はい。申し訳ありません……。

司令官 （声）イエロー。

紗江 はい。

司令官 （声）電動自転車が経費になるわけがなからう。大事な防衛費を私用

に使うなどもつてのほか。発言に注意しなさい。

紗江 はい。申し訳ありません……。

ここへ着替えた正則が慌ててやってくる。

正則 遅れました！申し訳ありません！

司令官 (声) グリーン。

正則 はい。

司令官 (声) 君は太り過ぎだ。先月からまた2キロも増えている。体調管理にもっと勤しみなさい。

正則 はい。申し訳ありません……。

多津子 あの、お言葉ですが司令官、私たちの会話を盗聴されていたんですか？

司令官 (声) 盗聴？

多津子 確かに私たちは地球防衛軍の管理下にあります。しかし家の中の会話まで盗聴されては――

司令官 (声) そうではない。報告があつたのだ。

多津子 報告とおっしゃいますと？

司令官 (声) 紹介しよう。地球防衛軍日本支部司令官補佐、柴原謙人くんだ。

壮大な音楽とともに、トイレから登場する柴原。

一郎 司令官補佐に敬礼！

皆 ハッ！（ポージング）

一郎 (ポージングで腰を痛める)

柴原 司令官補佐の柴原です。あなた方の会話はリアルタイムで司令官に報告させていただきました。

一郎 どういうことですか？司令官。

司令官 (声) カゾクマン諸君の最近の体たらくに我々は改善が急務と判断した。柴原くんには今後、君たちの監視、生活改善の任務に就いてもらう。

紗江 監視……。

正則 生活改善……。

司令官 (声) では柴原くん、あとを頼む。

柴原 かしこまりました。

球体の明かりが消えていく……。

柴原 お座りになってください。

多津子 紗江。司令官補佐にお茶。

紗江 あ、うん。

柴原 お構いなく。

紗江は柴原のお茶を入れる。

家族たちは座りつつ、

大輝 ずっとトイレに隠れていたんですか？

柴原 隠れていたわけではありません。トイレのタンクをチェックして
ました。

大輝 タンクを？

柴原 現在使っているのは80年代のトイレです。最新モデルに比べると
10リットルほど水量が多い。節水のため水の入ったペットボトル
を入れておきました。

多津子 生活改善って、そういうことなんですか？

柴原 これは一環です。電気ガス水道代は極力節約してください。あなた方
の生活は今後、ますます厳しくなりますから。

多津子 え？厳しくなるって……？

柴原 まず給料体制が変わります。来年度から、現在支払われている固定給
の30%をカット。

多津子 30%？！

柴原 プラス出来高払い、ということになります。出来高とはミドラー及び
怪人を退治した場合のみ支払われ、先ほどのように自衛隊が派遣さ
れた場合は出来高なし、ということです。

多津子 困ります！ただでさえ家計が苦しいのに30%もカットされたら―

柴原 これが国民の声なんです。私たちには、どうすることも出来ない。

多津子 ……そんな……。

柴原 特に中小企業の方々は、あなたたちより厳しい環境でやっておられ
る。それに比べれば恵まれている方だと思えますよ。

大輝 俺たちは工場でネジを作っているんじゃない、日本の平和を守って
いるんです！

柴原

結果が伴っていない。今年現れた怪人は15体、そのうち自衛隊が退治した数が13体。この数字を見て、あなた方が日本の平和を守っていると言えますか？

大輝

……。

柴原

そもその、カゾクマンの成り立ちを考えてみてください。ミドラー一族の壊滅を目的に組織されたあなた方は、自衛隊や警察の手を煩わせないために作られたいわば特殊部隊だ。それが今や、自衛隊の派遣人数のべ2600人、防衛費の半分が怪人退治に、そしてあなたたちの救出に使われている。本末転倒も甚だしい。

返す言葉のない家族たち。

ここで紗江が柴原にお茶を出す。

紗江

どうぞ。

柴原

ありがとうございます。（と一口飲んで）玉露ですか？

紗江

あ、はい。

柴原

これからは、もう少し安い煎茶にした方が良いと思いますよ。

紗江

……。

大輝

……俺たちは、日本の奴隷か？

柴原

……。

大輝

俺たち家族は代々、ミドラー一族から日本を守ってきた。それなのに、

柴原

この冷遇はなんだ？！

大輝

……奴隷ですか……まあそういう言い方も出来るかもしれませんが。

柴原

なに？

大輝

「ファミリー」の語源をご存知ですか？

柴原

それがどうした？

大輝

15世紀、ローマ人が使っていたラテン語の「famulus（ファミユラス）」が語源です。その「famulus」の意味は……「奴隷」「召使い」。

大輝

なんだと？

柴原

そういう意味では「カゾクマン」は日本の奴隷で間違いありませんね。

大輝

（柴原の胸ぐらを掴み）この野郎！

正則

（大輝を制して）お義兄さん！

一郎 やめる！大輝！

多津子 落ち着いて。

大輝 ……………。（手を離す）

柴原 勘違いしないでください。私はあなた方を奴隷だなんて思っていない。ただ……カゾクマンがヒーローだった時代はもう終わったんです。

皆 ……………。

柴原 かつて、ゴールデンタイムで放送されていたミドラー一族との戦いも今や深夜放送。最後のスポンサー企業も先日、手を引いたそうです。噂では地上波の打ち切りを検討されているようですよ。

多津子 そうなんですか？！

柴原 それでも、司令官はかつてのカゾクマンを取り戻したいと願ってられる。私はカゾクマン再生のためにここへやってきたのです！

正則 ……そのためには、一体どうすれば……？

柴原 一郎さん。腰の具合はいかがですか？

一郎 ……見ての通りですよ……。

柴原 率直に伺いたい。今のあなたに、レッドが勤まるとお思いですか？

一郎 ……………。

多津子 勤まりますよ、勤まりますとも。

柴原 多津子さんは黙っててください。

多津子 ……………。

一郎 ……正直、難しいと思います。

多津子 お父さん……。

柴原 私もそう思います。今すぐ大輝さんへ、レッドを引き継ぐのが賢明です。

一郎 わかりました……。

柴原 多津子さん。

多津子 私は戦えますよ、まだまだ。

柴原 世代交代は必要なんです。詩織さんにピンクを譲る気はありませんか？

多津子 ありません。

柴原 どうしてです？

多津子

あの子にピンクが勤まるとは思えません。格闘技の経験もなければ、血を見て気絶するようなか弱い子です。

柴原

それは多津子さんも同じだったじゃないですか。

多津子

あたし？

柴原

何の経験もないあなたは20歳の時にピンクを受け継いだ。絶大な人気を誇っていたあなたを私は子供の頃、ずっとテレビで見っていました。ファンクラブにも入っていました。

多津子

それは、ありがとう。

柴原

それがもはや見る影も無い。視聴者のためにも、ピンクの引き継ぎが急務なんです。

多津子

(シヨック) 視聴者の、ため……。

紗江

なんかひどい……。

柴原

私だけじゃない。これは国民の意見だと思って受け止めてください。

多津子

(シヨック) 国民の、意見……。

紗江

もっとひどい……。

柴原

ピンクを30年以上続けた人など未だかつて一人もいないんです。

正則

老眼のピンクなど私は見たくありません。

柴原

ちよつと待ってください。お義父さんとお義母さんが抜けてしまつたら、「カゾクマン」が5人、揃わないじゃないですか。

柴原

全国民に募集をかけます。そして優秀な人材が見つければ、養子縁組を結んでもらう。

大輝

おい。何でもかんでも勝手に決めるなよ。何が養子縁組だ？

柴原

そうでもしなければカゾクマンの存続すら危ぶまれるんです。

大輝

俺たち家族のことは、俺たちで決めるよ。

柴原

なにを言ってるんだ?! あなたたち家族は、あなたたちだけのものじゃないんだぞ!

大輝

……俺は、レッドなんか継がない。

柴原

なんだと?!

大輝

もうごめんだよ、カゾクマンなんて……。

一郎

おい、大輝……?!

多津子

冗談でしょ? 冗談よね?

大輝

冗談なんかじゃない! ずっと考えていたことなんだ。

多津子 ずっと、考えていた？

大輝 ……俺たちは、どこへ行つても晒し者だ。街を歩けば後ろ指を指され、詩織といれば「子供はまだか？」とからかわれる。ネットを開けば誹謗中傷の嵐で……そんな国民のために、何で俺たちが命を張らなきゃならない？

多津子 ……大輝。それは母さんたちも一緒。あなたたちと同じような経験を母さんたちだつてしてきてる。

大輝 それを、子供にまでさせるつもりか？

多津子 ???子供って???

大輝 倫太郎が今、どうなってるー

紗江 (遮って) お兄ちゃん、やめて。

大輝 紗江ー

紗江 お願いだから！

大輝 ……。

多津子 なによ？倫太郎がどうしたっていうの？

紗江 ううん。何でもないの。

大輝 どうして隠す必要がある?!これは家族全員の問題だろう?!

紗江 ……。

大輝 倫太郎は今、イジメを受けてる。カゾクマンの子供だからって……。

多津子 ええ?!

大輝 子供にそんな経験させてまで、カゾクマンを続ける理由があるか？

正則 お義兄さん、誤解するような言い方しないでください。倫太郎はイジ

メられてなんかいません。

大輝 そう思ってるのは正則さんだけですよ。

正則 倫太郎は必死に抵抗しているんです!悪口言う子と必死に戦っているんです!イジメじゃありませんよ!

玄関の引き戸が開く音。

詩織 (声) ただいま戻りました。

詩織、居間へとやってくる。柴原と目が合い、

詩織 あ、ごんばんは。

柴原 はじめまして。地球防衛軍日本支部司令官補佐の柴原です。

詩織 ブルーの妻の詩織です。いつもお世話になっております。

柴原 こちらこそ。よろしくお願いします。（と握手を求めます）

詩織 （それには気づかず多津子の前に）お義母さん、遅くなりました。皆

さん、お勤めご苦労さまです。

多津子 ちよっと行ってくる。

一郎 どこへ？

多津子は寝室に入るとバッグを手にすぐさま出てきて、

多津子 倫太郎の幼稚園に決まってるでしょ。

紗江 あたしも行く。

柴原 ちよっと待ってください。まだ話が―

多津子 すみませんけど、今度にしてください！

と、二人は玄関へと去る。

柴原 ………。

詩織 えっ？どうしたの？

大輝 ………。

詩織 どうなさったんですか？

一郎 ちよっと、いろいろありすぎて……何から話せば良いか……。

正則 お義兄さん。逃げないでくださいね。

詩織 え？

正則 倫太郎だって、世間と戦っているんです。

大輝 ………。

正則 「カゾクマンをやめる」だなんて、二度と言わないでください。

詩織 やめるって？え？どうということ？

正則 ………。

詩織 どういうことなの？大輝さん。

正則 司令官補佐。

柴原

はい。

正則

僕もかつてのカゾクマンを取り戻したいです。あの時のような、強いカゾクマンになりたいです。

柴原

良い心がけです。

正則

そのためには何でもします！やります！

柴原

ではまず、30キロ痩せましょう。

正則

30キロ？！

柴原

話は、それからです。

正則

……はい……。

溶暗……。

数日後。午前中。

新聞を読んでいる一郎。

その傍らでは、マッサージチェアに座って背中をほぐしている多津子。気持ちよさそうな声を出している。

一郎 ……母さん。

多津子 なあにい？

一郎 朝から、艶かしい声出さなくてくれるか。

多津子 しょうがないじゃないの……出ちゃうんだから……。

一郎は新聞を畳むと、ラックへ。その時多少、腰が痛み、

一郎 アタタタ……。

多津子 ちよつと待ってね。もうすぐしたら代わるから。

一郎 いいよ、別に。

多津子 ダメよ。これはお父さんのために買ったんだから……。

一郎 ……あのさ、母さん。実を言うと、そのマッサージチェア、俺の身体には合わないみたいなんだ。

多津子 ……。

一郎 揉み返しがすごくなってさ、整骨院の先生にも、マッサージチェアが原因なんじゃないかって言われて……。

多津子 ……。

一郎 そんなんで防衛費使わせてもらうのも何だしさ、返品しようかと思ってるんだけど……。

多津子 ……。

一郎 母さん？

多津子 (いびきをかく)

一郎 ……。

ここへ、カゾクマンスーツの入った洗濯かごを手に詩織が居間へ。

詩織 いいんですか？横にならなくて。
一郎 今日はだいたい調子がいいんだよ。
詩織 そうですか。

多津子 (いびき)

詩織 (それに思わず笑う) いつもですね。

一郎 ああ。5分も経たずに、すぐにあれ(眠る)だよ。

詩織 そんなに気持ち良いんですか？

一郎 詩織ちゃん、座ってみたことないの？

詩織 ええ、まだ。

一郎 遠慮しなくてもいいんだよ。

詩織 いやでも、私を使うわけにもいきませんし……。

一郎 だったらこっそり使ってみればいい。母さんが出かけてるときにでも。

詩織 それはそれで、やましいことしてるみたいで……。

一郎 大丈夫だよ。今度、使い方教えてあげるから。ね？

詩織 ……はい。ありがとうございます。

詩織は洗濯物を干そうとするも、ふと足を止め一郎の前に座る。

詩織 あの、お義父さん。

一郎 ン？どうした？

詩織 ちょっと、ご相談があるんですけど……。

一郎 え？なに？

詩織 私、パートに出てもいいですか？

一郎 パート？

詩織 はい。近くのスーパーで、今レジ打ちのアルバイト募集してるんですよ。皆さんが働くわけにもいきませんし、だからって、私がそんなに稼げるわけじゃありませんけど……。

一郎 まあ、それはありがたいけどね……。

多津子 ダメよ。ダメに決まってるでしょ。

一郎 なんだ。起きてたのか。

多津子 そんなにこの家にいたくない？そんなにお友達と遊ぶお金がほし

い？

詩織

違います。私は、少しでも家計を助けられたらと思って。

多津子
だったら家の中にいてももらうことが一番。それが何よりの助けになるの。

詩織

……はい……。

多津子

大体ね、最近、家空けすぎよ。同窓会だか何だか知らないけど。

詩織

すみません……。

多津子

それにね、詩織ちゃんだって世間に顔が知れてるのよ？そんな人が、パート始めたら家計苦しいのが知れ渡っちゃうじゃないの。

一郎

もういいじゃないか。詩織ちゃんだって家のことを考えて言ってるんだから。

多津子

またそうやって。すぐ詩織ちゃんの肩持つんだから。

一郎

持ってなんかいないよ。

多津子

はいはい。あたしはどうせ口うるさい姑ですよ。

一郎

そんなこと、一言も言っていないじゃないか。

多津子

マッサージチェア使いたいならね、あたしがいるときに堂々と使えばいいじゃない。どうしてあたしがいないときを薦めるの？

一郎

そ、それは……。

多津子

（詩織に）こっそり使う必要なんて一切ないのよ。あなたもこれで日頃の疲れを癒しなさいね。

詩織

あ、はい……ありがとうございます……。

多津子

（一郎を真似て）「大丈夫だよ。今度使い方教えてあげるから」。鼻の下ビロンよ。

一郎

そんなに伸ばしちやいないだろ。

多津子

伸びてたわよ。この目ではつきり見たんだから。

一郎

……。

多津子

（一郎を真似て）「今度使い方教えてあげるから」。ビロン。

一郎

……詩織ちゃん。洗濯物、干すんだろ？

詩織

ああ、そうですね。

詩織は洗濯かごを手に庭へ。特殊スーツを干し始める。

多津子 (一郎を真似て)「今度使い方教えてあげるから」。ビロロビロロ。
一郎 ……………。

ここへ玄関引き戸の開く音。紗江が菓子折りを手に居間へ。

紗江 ただいま。

詩織 お帰りなさい。

多津子 (一郎を真似て)「今度使い方教えてあげるから」。ビロロビロロ。

紗江 ええ？なにしてんの？

多津子 お父さんの真似よ。

紗江 全然似てくない？

多津子 それがそっくりなのよ。ねえ？お父さん。

一郎 紗江。自転車のカギ。

紗江 (キーを渡して)え、どこ行くの？

一郎 整骨院だよ。マッサージしてくる。

紗江 大丈夫？車で行けば？

一郎 今、パトロール中だろ。

一郎はキーを手に玄関へと去る。

多津子 (菓子折り)なによ？これ。

紗江 なんか、園長先生がウチにつて。母さんの文句が利いたんじやない？

多津子 どのの？

紗江 よくわかんないけど。おせんべいだって。

多津子 こういのは直接ウチに持って来て然るべきでしょう？(菓子折りを手に)それになに？どこのメーカーだかわからないものなんて。最

低限、虎屋の羊羹ぐらい持って来なさいよ。

紗江 ……………。

多津子 突き返しちゃっても良かったんだからね。

紗江 わかったよ。あとで返すよ。

多津子 いいわよ、返さなかったって。せっかくももらったんだから。

紗江 ……………。

紗江 ……………。

詩織が洗濯かごを手に居間へあがる。

多津子 詩織ちゃん。これ（菓子折り）開けちゃって。

詩織 あ、はい。

詩織は菓子折りを受け取ると、洗面所へかごを置き、台所へ。

多津子 ったく。まるで誠意が感じられないわ。

紗江 別に先生たちだけのせいじゃないんだからさ。

多津子 でも責任はあるでしょう？先生たちに。

紗江 あたしたちの方がよっぽど責任あると思うけど。

多津子 ……。

紗江 あたしたちが、ちゃんと怪人退治してればさ……。

多津子 わかってるわよ、そんなこと。

紗江 ……。

多津子 お父さんの腰が治れば、怪人なんていつでも倒せる。

紗江 あれだけ病院たらい回しにされてんだよ？もう治るとは思えないよ。

多津子 だからマッサージチェアをー

紗江 それで騙し騙しやるのも限界があるって。

多津子 ……でも、肝心の大輝がさ。

紗江 あのさ、これはあたしの予想でしかないんだけど……。

多津子 え、なに？

紗江 もしその予想が当たってたら……今が、踏ん張り時だと思うのよね。

多津子 ……どういうこと？

紗江 もしかしたら……今ある問題が全部解決しちゃうかもしれないの。

多津子 なによ？勿体ぶらずに話さないよ。

紗江 ここ最近、怪人じゃなくて、ミドラー自らが出撃してるでしょ？何でだと思う？

多津子 それは、お父さんの腰痛が治らないからチャンスだと思ってあれしたんじゃないの？

紗江 あたしもそう思ってたんだけど……もしかしたら、もう他に怪人がいないんじゃないかと思って。

多津子

ウソオ?!

紗江

この前の、オンエアチェックした?

多津子

したわよ、もちろん。

紗江

ジョッカーの数もさ、前よりずいぶん少なくなったと思わない?

多津子

ほんとに?!

紗江

いや、まだわかんないけど……。

多津子は慌ててテレビとレコーダーのリモコンを操作。

多津子

ってことはなに? あたしたちが倒すべき怪人は……。

紗江

ミドラーひとり。それで……。

多津子

ミドラー一族は、壊滅……。

紗江

お兄ちゃんはレッド継がなくて済むし、父さんは治療に専念できる。

倫太郎だっていじめられなくなるかもしれない……。

多津子はレコーダーを再生。先日の戦いがテレビから流れる。

オープニング曲、「父レッド!」「母ピンク!」「兄ブルー!」

「妹イエロー!」「婿グリーン!」「五人揃って!」「カゾクマン!」

多津子が一時停止ボタンを押す。

紗江

え? なによ?

多津子

ちよつと、話変えてもいい?

紗江

いいけど、別に……。

多津子

次からさ、立ち位置変わってくれない?

紗江

は? なんで?

多津子

(テレビを)見てわかんない? 目尻のところにシミができてるの。ファ

ンデーションで隠したんだけどさ。

紗江

(テレビに近づき)えー。こんなの誰も気づかないって。

多津子

あんたね、4Kをなめちゃダメよ。

紗江

変わるのはいいけど、司令官に相談してからにしてよ。

多津子

わかってるわよ。

また再生。曲を歌い始めるカゾクマン。

紗江 いい加減、これ歌うのも飽きたわ。

多津子 これがマストなの。テレビ局との契約で。

紗江 だったらせめて新曲にしようよ。

多津子 それだけはイヤ。絶対に曲は変えない。

テレビから「あとは桃色の愛があれば……大丈夫」。

紗江 母さんこれに命かけてるもんね。

多津子 そう。

紗江 ちよつと早送りしない？

多津子 ああ、そうね。

多津子早送り。また再生すると「ここは俺に任せろ！」と手下をなぎ倒しておく兄ブルーの映像。

紗江 ちよストップ！（一時停止された画面を見て）ほら。めっちゃ少なくない？

多津子 ほんとだ……。

紗江 めっちゃ弱いし、このジョッカーバイトなんだよ。

多津子 ウソ……。

紗江 絶対ヤバイんだって！ミドラーたちも、確実に！

柴原 （声）よくぞお気づきになられた！お見事です！

多津子／紗江 ？？

庭から柴原が現れる。

柴原 我々も、ここ数回の戦いを分析していたところです。そして紗江さん、あなたと同じ結論に行き着いた。

多津子 ということは……。

柴原 決戦の日は、近い。

多津子

(緊張) ……………。

紗江

(緊張) ……………。

紗江

……わっ！なんか鳥肌立つてきちゃった……。

ここへ息を切らしながらジャージ姿の正則が庭からやってくる。
と、縁側にへたり込む。

柴原

休憩は、3分です。

正則

3分?!

柴原

何か、文句がおありですか？

正則

いえ……。

せんべいに乗せた菓子入れを手に、台所から詩織が出てくる。

詩織

あ、おかえりなさい。

柴原

ただ今、戻りました。

多津子

詩織ちゃん。司令官補佐に、お茶。

柴原

お水で結構。安い煎茶は口には合いませんので。

詩織

わかりました……正則さんは、コーラでいいですか？

正則

はい。

柴原

コーラなんて以ての外。今、消費したばかりのカロリーが台無しです。

詩織

正則さんも、お水で結構。

詩織

わかりました。すみません……。

詩織は菓子入れを座卓に置くとまた台所へ。

柴原

多津子さん。先ほど本部から連絡がありました。先日バズーカで破壊

多津子

した家の住民が、あなたに直接の謝罪を求めているそうです。

柴原

直接、ですか？

多津子

はい。あなたに頭を下げてもらわなければ「気が済まない」と。

多津子

そんなこと一度もなかったじゃないですか?!

柴原はメモ書きのようなものを突きつけて、

柴原　今すぐこの住所を訪ねてください。先方がお待ちです。

多津子　わかりました……。

柴原　くれぐれも、菓子折りを忘れずに。

多津子　あの、領収書の宛名は本部と日本支部とどちらに？

柴原　経費で落とすおつもりですか？

多津子　えっ？落ちないんですか？

柴原　当たり前です。我々も防衛費運用の透明性が求められている。あなたの

の単純ミスに使える経費などこれっぽっちもありません。

お盆に水とグラスを乗せ、詩織が台所から出てくる。

多津子　ねえ詩織ちゃん。さっきのおせんべい、どうした？

詩織　（菓子入れを指し）あの、それですけど……。

多津子　ええ？もう開けちゃったの？！

紗江　いや母さんが「開けろ」って……。

多津子　包み紙まだ残ってるわよね？破いたりしてない？

詩織　あ、まあ……。

多津子　悪いんだけどもう一回、包み直してくれる？開けたってわからないように。

柴原　多津子さん。この場合の菓子折りはケチらない方がいい。

多津子　それは……そうですね……。

柴原　家計が苦しいのはわかります。しかし、虎屋の羊羹ぐらいでなければ、あなたの誠意は伝わりません。

多津子　でも、あれは高くって……。

柴原　ならば、文明堂のカステラだ。

多津子　文明堂……。

柴原　今すぐお行きなさい。紗江さんとともに。

紗江　ええ？！あたしもですか？！

柴原　そうです。あなたにも多少なりとも責任がある。

紗江　あたしがなにしたらって言うんですか？

柴原

あの時、幼稚園からの電話に出なければ多津子さんがバズーカを手にすることはなかった。そう思いませんか？

紗江

いや、でも――

多津子

そう思います。

紗江

母さん……。

多津子

行こう、あんたも、頭下げに。

紗江

えー……。

多津子

(紗江の手を引き) それじゃあ、いってきます。

紗江

えー……。

多津子に玄関へと連れ去られる紗江。

多津子

(声) 詩織ちゃん！鞆とコート。

詩織

あ、はいっ。

詩織は寝室から多津子のバッグとコートを手にすると、玄関へ。

多津子

(声) ありがとう。いってきます。

詩織

(声) いってらっしゃい。

紗江

(声) えー……。

玄関の閉まる音。

この間、ペットボトルの水を飲んでいる正則と柴原。

正則

あの……単純な疑問があるんですけど……。

柴原

なんででしょう？

ここへ戻ってくる詩織。

正則

どうして紗江は、ダイエットしなくて済むんでしょうか？出会った頃に比べるとかなり体重増えていますし。

柴原

なるほど。良い質問です。

正則 彼女も一緒にダイエツトした方が良いと思うんですけど……。

柴原 戦隊ヒーローもののイエローには昔から大柄なイメージがあります。カレー10杯を即座に平らげ、パワフルでエネルギーシユなカラーの象徴です。イエローが大柄でも、ちびっ子の夢を壊すことはない。ああ……。

柴原 しかしグリーンはどちらかと言えばか細く、体力よりはその優れた頭脳で相手を倒すイメージだ。あなたはその真逆を行っている。

正則 ……すみません。

柴原 はつきり申し上げて、戦隊ヒーローにぼっちゃりは二人いませんです。

正則 ……今から、イエローとグリーンを交代しちゃあ……。

柴原 (厳しい視線) ……。

正則 ダメですよね……。

柴原 「かつてのカゾクマンを取り戻したい」あの言葉は嘘だったんですか？

正則 いえ。嘘じゃありません。

柴原 だったら頑張りなさい！30キロ落としなさい！

正則 はい……。

柴原 (詩織に) トイレをお借りします。

詩織 あ、どうぞ。

柴原はトイレへ。

詩織 ……そんなに凄かったんですか？先代のカゾクマンって。

正則 詩織ちゃん、知らないの？

詩織 私まだ小さかったし、ほとんど記憶になくて……。

正則 もの凄い人気だったんだよ。先代のレッド、まだブルーだったお義父さん、若かりしピンクのお義母さん、先代レッドの従兄弟の奥さんの弟の息子さんのイエロー、もっと遠縁のグリーン……みんな強くて格好良かった。

詩織 へー。

正則 僕らの子供の頃なんてさ、誰もがカゾクマンになりたくて戸籍取り

寄せたりするのが流行ったんだよ。

詩織 誰が一番人気あったんですか？

正則 そりゃあレッドだね。カゾクマンの中でも、圧倒的に強かったから。

詩織 正則さんは？

正則 僕は、ブルーが好きだった。

詩織 お義父さんですか？

正則 うん。でもここだけの話、お義父さんが一番人気なかったの。

詩織 え、どうして？

正則 お義父さんは怪人やジョッカーを絶対に殺さなかったから。気絶させるだけで。

詩織 へー。なんかお義父さんらしい。

正則 そう。その優しさが好きだったんだよね。「弱い」って言う人もいたけど。

詩織 お義父さん、それ、ご存知なんですか？

正則 うん。それで気に入ってもらったみたいな感じだから。

詩織 ああ、お見合いのときに？

正則 そうそう。

詩織 でも、びっくりしたでしょう？まさか相手が紗江さんだったなんて。

正則 そりゃあね、憧れのカゾクマンが目の前にいるわけだから。

詩織 そのカゾクマンになれたじゃないですか、正則さん。

正則 ……多分、情性だと思っただけだね……。

詩織 え？情性って？

正則 誰でも良かったんだよ。あのときは先代のグリーンが介護が降りて、誰もグリーンやる人がいなかったから……。

詩織 そんなことないと思いますけど……。

正則 絶対そうだよ。でなかったら、僕みたいなバツ2の男、選ぶわけないもん。

詩織 え、バツ2？正則さんが？

正則 あ、言っただけだったっけ？

詩織 ええ……。

正則 そうなの、バツ2なの。どういうわけか、二人ともすぐ他に男が出来ちゃって……愛想つかされちゃうんだよね……。

詩織 ああ……。

ここへトイレットペーパーの「カタカタ」鳴る音。

正則 ……。

詩織 ……。

「カタカタ」がしばらく続いている。

正則 ……使いすぎじゃない？

詩織 ああ……まあ……。

水洗の流れる音。柴原が出てくる。

柴原 正則さん、喋ってる場合ではありませんよ。すでに3分を遠に過ぎて

います。

正則 あ、はい。

柴原 ダッシュュ！ダッシュュ！

正則 はいっ！

正則は庭の向こうへとダッシュュで去る。

詩織はお盆などを片付け始める。

詩織の目を盗み、あたりを確認する柴原。

台所へ下がろうとする詩織にロックオンして、

柴原 ちょうど良い機会だ。少しお話しさせていただいても？

詩織 私に、ですか？

柴原 ええ。

詩織 何でしょう……？

柴原 デリケートな部分に触れますよ。

詩織 ……跡継ぎのお話ですね。

柴原 さすが。察しが良い。

詩織

……（頭を下げ）申し訳ありません。

柴原

謝る必要はありません。我々は、あなたたちのことを心配しているんですよ。

詩織

心配、ですか？

柴原

大輝さんとチヨメチヨメしていますか？

詩織

チヨメチヨメって……。

柴原

その辺りの察しは悪いようですね。

詩織

あ、いや、わかりますよ。わかりますけど……チヨメチヨメって……。

柴原

あなた方の診断結果を拝見いたしました。大輝さん詩織さんともに健康に問題はないようです。

詩織

はい……。

柴原

となればチヨメチヨメしていないか、夫婦の中が冷めきっているか。

詩織

そんなことはありません……。

柴原

チヨメチヨメしていない、と？

詩織

あの、その言い方やめていただけですか。

柴原

ならばニヤンニヤンしていない、と？

詩織

……夫婦仲が、冷めきっているということはありません……。

柴原

そうですか……。

詩織

……。

柴原

キツイことを言うようだが、カゾクマンの家に嫁いだ以上、あなたは跡継ぎを産まなければなりません。言うなればカゾクマンの存亡は

詩織

詩織さんにかかっているとと言っても過言ではないのです。

柴原

……わかっています。

柴原

あなたの辛い胸の内は想像に難くない。しかし我々地球防衛軍も辛い立場であることをご理解いただきたい。

詩織

……。

ここへ家のインターホンが鳴る。

玄関へ行く詩織。引き戸を開けて、

詩織

（声）はい？

虎美

（声）あなた、詩織さん？

詩織

(声) そうですけど……どちらさまですか？

あたりに耳鳴りのような音がこだまする。

詩織

(声) ちょっと、なんですか？……勝手に上がらないでください……。

後ずさりしながら入ってくる詩織。

追いつめているのはスーツ姿の虎美。

虎美

……。

詩織

……司令官補佐……。

柴原

誰だ？！貴様！！

虎美

(黙って近づき) ……。

詩織

……司令官補佐、助けて……。

柴原

……私が、なぜ司令官というポジションにいるかわかりますか？

詩織

え？

柴原

私は、とてつもなく弱いのです。

詩織

……。

虎美

……。

虎美が近づくにつれ、どんどん大きくなって行く耳鳴り。

その音に思わず耳を塞ぐ詩織。

ここへ、庭から大輝が帰ってくる。

大輝

ただいま。

突然止む。

詩織

あれ……？

虎美

こんにちは。大輝さん、でいらっしやいますよね？

大輝

あ、そうですけど……。

虎美

(鞆から名刺を出して)あの私、こういうものでございまして……。

大輝 保険会社の方ですか？

大輝 はい。カゾクマンのみなさんはお仕事柄、生命保険にも傷害保険にも入れないと伺いました。そんな皆さんでもお入りになれるプランが出来ましたので、ご紹介にあがったんですけど……。

大輝 ああ、はい……。

柴原 良かったじゃありませんか。カゾクマンに怪我はつきものです。入っておいて損はありませんよ。

大輝 あなたが決めることじゃない。何度言えばわかるんですか？

柴原 ……それは、失礼。

詩織 ねえ、大輝さん。

大輝 母さんたちは？

詩織 さつき出かけた、お義父さんも。ねえー

虎美 お話だけでも聞いていただけませんか？大変お得なプランになって

大輝 おりすので……。

大輝 おっしゃる通り、我々には何の保障もありません。こちらもお話を伺いたい。

詩織 ねえ大輝さんー

虎美 ありがとうございます。では、早速……。

大輝 その前に、着替えてきてもよろしいですか？

虎美 もちろんです。

大輝 詩織、この方にお茶。

詩織 あ、うん……。

大輝は着替えに去ってしまふ。

詩織は不穏な表情を浮かべ……。

……。

詩織
虎美 (笑みをこぼす)

詩織はお盆を手を台所へ……。

虎美は保険のパンフレットなどを用意しつつ……。

あたりが薄暗くなる……。

柴原 申し訳ありません。ブルーが帰ってくるとは誤算でした。

虎美 まあ、よい。彼奴もカゾクマンとしてのモチベーションを失っている。杜撰なパトロールでもしてきたのだろう。

柴原 おそらく。

虎美 作戦は、このまま実行する。

柴原 かしこまりました。

虎美 ……よくやった。怪人、男前男。

柴原 もったいないお言葉です。

虎美 特に司令官のモノマネは見事だった。もう一度、聞かせてくれるか？

柴原 はっ。(口元を動かさずに)「カゾクマン諸君、ケンカはよしなさい」。

虎美 しかも、腹話術ではないか。

柴原 はい。いっこく堂の動画を何度も見て、研究いたしました。

虎美 お前は顔も男前だが何よりも心が男前だ。

柴原 ありがたき幸せ。

虎美 それが、例のマッサージチェアか？

柴原 はい。電気店の店員に扮し、揉み返しがひどいと評判の商品をやつらに薦めました。レッドの腰痛は今はピークのはずです。

虎美 何から何まで男前ではないか。

柴原 ミドラー様のためなら、私はいくらでも男前になります。

虎美 これ以上はならなくてよい。お前に惚れてしまいそうだ。

柴原 (動揺し) ミ、ミドラー様……それは、いくらなんでも……。

虎美 フッ。こんなことで動揺するとは。まだまだ本物の男前ではなさそうだ。

柴原 も、申し訳ありません。もっと精進いたします……。

虎美 頼むぞ。男前男。

柴原 はいっ。

あたりが明るくなる。

ここへお盆にお茶を乗せ、台所から出てくる詩織。虎美にお茶を出す。

詩織

(怪しむが) ……どうぞ。

虎美 (詩織を見つめ) ……。

　　またも耳鳴りの様な音が聞こえてくる。

詩織 ?!

　　立ち上がる虎美。詩織を追いつめる。

　　詩織は柴原の元へ駆け寄り、

詩織 司令官補佐……。

　　柴原は即座に、詩織の口元にハンカチを当てる。

　　少しして気を失う詩織。

　　虎美は鞆から小さなラジカセを出すと、停止ボタンを押す。と
　　耳鳴りが止まる。

柴原 ……カセットでしたか。

虎美 ああ。CDだと音が飛ぶ可能性がある。

柴原 さすがです。

　　柴原は詩織を肩に抱えると、

柴原 では参りましょう。

虎美 いや。私はここに残る。ブルーに顔が知れた。

柴原 ミドラー様、それはあまりにも危険です。

虎美 案ずるな。私を誰だと思っている。

柴原 しかし……。

虎美 カゾクマンとはずっと敵対してきた。そんな相手と、こうしてテーブルを囲うのも、悪くはない。

柴原 ……わかりました。しかし、何かあればすぐにご連絡を。
虎美 ああ。

柴原は詩織を抱え、庭から去って行く。

虎美 ……長かったな、カゾクマン。いよいよ決着のときだ。

虎美は一口、お茶を飲んで、

虎美 まずい！！

ここへ着替えた大輝が居間へ。

大輝 お待たせしました。

虎美 とんでもございません。では早速、ご説明させていただきませぬ。

大輝 ちよつと待ってください。(台所に向かい) 詩織ー！詩織ー！

虎美 さつきお出かけになりましたよ。

大輝 ……え？

虎美 「買い物に行く」とおっしゃって。

大輝 ああ……そうですか……。

虎美 はい。

雷が疼いている。

大輝 ……。

虎美 よろしいですか？お話をさせていただいて。

大輝 あ……お願いします。

虎美 ではまず、こちらのプランからご紹介しますね。

どこかに雷が落ちる。そして雨が降ってきた。

大輝は残されたお盆を手にとって……。

大輝 雨……。

容暗……。

同日、昼過ぎ。

表は雨が降り続き、カゾクマンスーツは部屋干しされている。雨に濡れてきたのか、台所からバスタオルを肩に乗せた正則が水を飲みながら出てくる。

居間ではパンフレットを読んでいる一郎、傍らでは虎美が電卓を打っている。

部屋の隅では大輝が詩織に電話をかけていて……。

大輝 ……………。(電話を切る)

正則 出ませんか？

大輝 ええ。

正則 どこかで雨宿りでもしてるじゃないですかね、きっと。

大輝 だといいんですけど……。

虎美 (電卓を見せ)こちらが月々の掛け金になります。

一郎 やっぱ、そのくらいかかっちゃいますよねえ。

虎美 でも還暦を過ぎられますと掛け金が倍になりますので、今、ご加入されるのが、お得なんじゃないかと。

一郎 それは、わかりますけど……。

虎美 それに、ご主人の通院費はすぐに適用になります。万が一「ミドラーに敗れて」ご主人が亡くなった場合は(パンフレットを差し)こちらの金額が保障されているわけですから、ご家族は安心なさると思いますよ。

……………。

大輝 大輝さんや正則さんも、「ミドラーに敗れて」亡くなったときのことを考えたら、今から準備された方がよろしいんじゃないでしょうか？

……………。

……………。

正則 もしもですよ、「ミドラーに敗れて」5人が一遍に亡くなったとしても、奥様とご長男のお金の負担は減るわけですし。

一郎 なんか、嫌な話ですね。ミドラーにやられることばかりで……。

虎美 申し訳ありません。そういう商売なものですから。

一郎 いやいや。わかってはいるんですけどね。

虎美 それにミドラーは「とてつもなく強い」ですし。

大輝 あの、傷害保険まではわかるんですけど、生命保険が降りるといのはおかしくありませんか？我々がやられたら、ミドラーに征服されるわけですし。

虎美 日本には自衛隊がいますから。私どもと致しましては、征服されるとは思っておりません。

大輝 自衛隊、ですか……。

（ボソツと）フン。目障りな。

正則 え？目障り？

虎美 ええ。ミドラーが。

ああ……。

大輝 ……国民に、危機感はないってわけですね……。

正則 ないんでしょうね、きつと。今年のハロウィンでも、ミドラーの格好した子がたくさんいましたし……。

平和ボケしすぎですよ。バカな奴が多すぎる。

（咎めて）大輝。

大輝 だってそうだろう？どうして敵のコスプレなんかできる？

虎美 でも、若者が憧れる気持ちはわかりますよ。ミドラーは「エレガンスで美しい」ですから。

そうでしょうか？僕にはただの、おばさんにしか見えない。

虎美 （思わず）なんだと？！

えっ？

あ、いえ……そうですよね、おばさんですよね、ミドラーなんて。

そうですよ。クソババアですよ、あんな奴。

（悔しく）クツ……。

それを真似る国民も、バカとしか言いようがない。

大輝。口が過ぎるぞ。

大輝 そんなに自衛隊が良いなら、俺たちなんて必要ないじゃないか。カゾクマンなんていつでもやめてやるよ。

一郎 そういうわけにはいかないんだ。俺たちがやめたら防衛費は今の数倍に膨れ上がる。消費税は10%どころじゃなくなるんだぞ。

大輝 ……………。

一郎 それに、カゾクマンが、この家の生業なんだ。

大輝 俺は……望んで、この家に生まれてきたわけじゃない。なんなら普通の家に生まれたかった。

一郎 !!

正則 お義兄さん、それは言っちゃいけませんよ。

大輝 もうこりごりだよ。この国の人間は何でもかんでも人に押し付けて、そのくせ批判だけは一丁前にする。そんな奴らを、もう守る気になんてなれない。

一郎 ……………。

大輝 税率を上げて、自分たちの手で自国を守ればいい。

一郎 その言葉は、それこそお前の言う「押し付け」じゃないのか？

大輝 ……………。

一郎 そんなにカゾクマンが嫌なら辞めればいい。司令官には俺から説明する。

正則 お義父さん…………。

一郎 心配しなくても大丈夫だよ。司令官補佐が今、募集をかけてくれてる。

良い人材が見つかるかもしれない。

正則 もし、見つからなかったら…………？

一郎 お千代さんに、声かけてみるよ。

正則 お千代さんって…………先代の、グリーン？

一郎 ああ。

正則 でも今、介護されてるはずじゃ…………？

一郎 あの時は階段で足を滑らせてね、一時的に介護認定が降りただけなんだ。今はもう完全に治ってるから。

正則 ……でも、平均年齢がものすごく上がっちゃいますよ？

一郎 その分、経験値があるってことだよ。

正則 ……………。

大輝 ……………。

ここへ家の電話が鳴る。慌てて出る大輝。

大輝 もしもし……なんだ、母さんか……わかった。すぐ行くよ。

大輝は車のキーを手にすると、

大輝 母さんたち、迎えに行ってくる。

正則 あれだったら僕、行きましようか？

大輝 じゃあ途中のイオンで降ろしてもらえますか？詩織、探したいんでわかりました。(一郎に) じゃちよつと、行ってきます。

一郎 悪いね。

正則 いえいえ。

大輝と正則は玄関へと去る。

虎美 なんだかすみません。大変なときにお邪魔したみたいで……。

一郎 こっちこそすみません。お客さんがいらっしやるときに……。

虎美 では、私もそろそろ……。こちらのパンフレットは置いて帰りますので、ご家族のみなさんとご検討なさってください。

一郎 ……あの、わざわざ説明までさせて申し訳ないんですけど、私は保険には入りませんので。

虎美 ……はい？

一郎 妻や娘夫婦は、お願いするかもわかりませんがね。

虎美 え、でも、ご主人が一番加入された方が……。

一郎 ……ご覧の通り、私たち家族は今、あまり良い状況じゃありません。私の腰も、年齢的にも限界がきています。次の戦いで、ミドラーとは

決着をつけるつもりです。

虎美 ……決着、だと？

一郎 ミドラーさえ倒せば私たちはカゾクマンとしての任務を終えられる。

そうすればどこにもいる、普通の家族として暮らせますから。

虎美 ……どうやって、ミドラーを倒すつもりだ？

一郎 私がミドラーと、刺し違える覚悟です。

虎美 ほう……。

一郎 そのときはおそらく……私の命はないでしょう。

虎美 ……………。

一郎 加入したばかりで保険が降りるとなれば、そちらの会社も迷惑でしょうし……あなた方を騙しているようで、保険に入るのは気が進みません。

虎美 ……フン。格好良い言葉を並べおって。

一郎 全然、格好良くなんかないんですよ。

虎美 当たり前だ！

一郎 本来なら、とっくの昔にカゾクマンの任務を終えていたはずなので……。

虎美 なんだと?!それは一体どういう意味だ?!

一郎 ……なんか、怒っていらっしやいます?

虎美 ああ?!

一郎 いや突然、喋り口調が……。

虎美 あ、いえ。全然、怒ってなんか……。

一郎 お気持ちにはわかります。長時間説明していただいたのに、結局お断りするんですから。

虎美 とんでもございません。こういったことはよくあることです。

一郎 本当に申し訳ありません……。

虎美 いえ……ところで、どういう意味なんですか?カゾクマンの任務を終えていたって……。

一郎 私の父が、ミドラーの父親であるヘドラーを倒したのは、ご存知ですよね?

虎美 もちろんです。あの日のことは、二度と忘れません。

一郎 あの時は、父とは別行動を取っていたんです。娘である、ミドラーを探しに……。

舞台の両サイドに幕が降りる。

一方の幕に、ミドラーを探す若かりしブルーの一郎。

一郎 そして私は見つけました。まだ、幼かったミドラーを……。

もう一方の幕に、幼き日のミドラーが浮かび上がる。

あらぬ方向を見、呆然と立ち尽くすミドラー。

一郎 彼女は父親を倒されたショックで、その場にうずくまり、泣き始めたんです……。

幼いミドラーが膝を抱え、しくしくと泣き出す。

一郎 ……彼女の背中を見ていたら、私は彼女を捕らえる気にも、ましてや、仕留める気にもなれなかった……。

ミドラー ……。

ヘルメットを脱ぐブルーの一郎。そして、その場を立ち去っていく……。

両サイドの幕が上がる。

一郎 ……あの時、私がカゾクマンとして任務を全うしていれば、未だに戦いが続くことはなかったんです……。

虎美 フン。敵に情けをかけるとは、愚かな男よ。

一郎 全くその通りです。息子や娘それから孫にだって、苦労かけずに済んだのに……。

虎美 ……。

一郎 ですから、ミドラーとの決着は、私自身の決着でもあるんです。

虎美 面白い。貴様がそこまでの覚悟とは知らなかった。

一郎 ？？

虎美 望むところだ。この長きに渡る戦いに決着をつけよう。

一郎 ……どうしたんですか？長谷川さん。

虎美 今すぐカゾクマンスーツに着替えるのだ、レッド！私もメイクと衣装を着てくる。

一郎 えっ……。

虎美 フッフッフ…ハッハッハッハッ！

虎美は高笑いしながら玄関を出て行く。

一郎は、座卓の名刺を手に取ると……。

一郎

……保険外交員、長谷川虎美……虎美……虎美……美虎……ミドラ
……(ハツとして) ミドラ!

一郎は慌てて着替え始める。それから部屋干ししてあるレッド
スーツに袖を通すと、

一郎

(思わず手が止まり) うっ……生乾き……。

一郎は着替え終わると、ミドラを追い玄関へ去る。

照明変化。庭にスポット、ここではないどこかとなる。

ここへ縛られた詩織を連れ、柴原が登場。詩織を丁重に扱い、

柴原

お座りになってください。

詩織

……。

詩織、縁側に腰掛ける。

柴原は詩織にロックオンして、

柴原

こつちを見て。

詩織

(言うことを聞かず) ……。

柴原

見るんだ!

詩織

(仕方なく見て) ……。

柴原

良い表情だ。その怒りに満ちた目がたまらなく私をくすぐる。

詩織

……なにするつもりですか?

柴原

安心してください。私はあなたを殺したりなんかしない。

詩織

そんな心配はしていません。私はブルーの妻です。いつでも死ぬ覚悟

柴原

は出来ています。

柴原

……詩織さん。あなたとはもつと別の形で出会いたかった。器の小さ

詩織

い大輝さんにはもつたいなさ過ぎる。

詩織

……。

柴原 いっそのこと大輝さんと別れてはいかかですか？

詩織 嫌です。あなたみたいな不細工な男。

柴原 ぶ、不細工だと？

詩織 何が男前男よ！せいぜい65点の顔面のくせに！

柴原 65点だと？！

詩織 その狐の様な目、出っ張った頬骨、浅黒い肌、かざかざの唇、独特な

息の匂い……。

柴原 独特な臭いだと？！

キスされたとき、おじさん特有の匂いがしたわ。

柴原 (ワナワナ) ……。

詩織 そのウザい前髪―

柴原 まだ続くのか？！

詩織 どう見てもアラフィフなのに若者ぶってるところが何よりみっとも

ない！男前というのは見た目じゃなくて、心のことを言うんだよ！

バカ！

柴原 ……詩織さん、どうやら私の目が節穴だったようだ。あなたはもっと

おしとやかな女性だと思っていました。どうやら猫を被っていたよ

うですね。

……。

柴原 そんな子猫ちゃんには、死よりも辛い思いをしてもらいましょう。

詩織 死よりも、辛い……？

柴原 まもなく、そのときは訪れます。

詩織 ……。

柴原 さあ、来るんだ。

その場から連れ去られる詩織。

照明変化。カゾクマンの家となる。

居間にはすでに帰ってきた様子の多津子、紗江、正則の姿。

表はまだ、雨が降り続けている……。

多津子はパンフレットを手に取って、

多津子

これがなに？月々の掛け金？

正則 そうですね。

紗江 やっぱり結構かかるもんなんだね。

多津子 でも入った方がいいじゃない。お父さんの通院費もすぐに適用になるんだし。

紗江 でもそんなお金、どっから捻出するの？給料だって減らされちゃうんだよ？

多津子 大丈夫よ。詩織ちゃんにパートさせれば。

紗江 それはあまりにもひどくない？あたしたちの保険のためにパートさせるなんて。

多津子 自分で言い出したのよ。パート始めたって。

紗江 詩織さんが？

多津子 そうよ。多分、遊ぶお金が欲しかったんだと思うけど。それ保険代に回してもらえば万事解決じゃない。

紗江 ……あのさ、何がそんなに気に食わないわけ？詩織さんの別に。

紗江 ウチのことよくやってくれてるし、あたしたちのことも気遣ってくれるしさ、結構完璧なお嫁さんだと思うけど。

多津子 それがダメなのよ。

紗江 は？どういうこと？

多津子 ねえ。それよりどこ行ったの？司令官補佐は。

正則 それがよくわかんないですよ。トレーニングに付き合ってくれてたんですけど、突然いなくなっちゃって……。

多津子 言ってたわよね？住民の方が「怒ってる」みたいなこと。

正則 ああ……お義母さんに頭下げてもらわないと気が済まないとかって。それが逆に感謝されちゃったのよ。(紗江に) ねえ？

正則 ええ？

紗江 なんか家の立て替え検討してたみたいでさ、それ全部、防衛費で賄えることになったからって。

多津子 全く。カステラ買って行って損したわよ。

ここへ玄関の引き戸が開く音。

居間に大輝が入ってくる。

正則 見つかりました？詩織ちゃん。

大輝 ……いいや。LINEも全く既読にならない。

正則 そうですか……。

多津子 どうせまた、お友達と遊んでるんでしょ。

大輝 だとしたら俺のところは連絡がくる。

多津子 連絡がないってことはあんたにやましいことでもあるんじゃないの？

大輝 どういう意味だよ？

多津子 よくある話じゃないの。家庭に不満のある主婦が不倫に走るなんてこと。

紗江 母さん、ドラマの見過ぎだよ。

大輝 不満があるとしたら、原因は母さんだろ。何かにつけて詩織をいびつて。

多津子 人聞きの悪いこと言わないでちょうだい。あれは教育よ。

大輝 その教育が、どれだけ詩織のストレスになってるか、母さんにはわからないだろう？

多津子 不満があるなら、あたしにぶつけてくればいいじゃないの。ストレスなんか抱え込まないで。

大輝 嫁の立場で、母さんに逆らえるわけないだろ！

多津子 逆らえばいいじゃない！あたしはいつだって聞く耳もつわよ！

紗江 そうは思えない……。
多津子 文句だって言えればいいのよ！あたしはいつだって受け入れてあげるわ！

紗江 そんなわけない……。

大輝 もう限界だよ！何もかも！俺はカゾクマンを辞める！詩織と、この家を出て行くからな！

紗江 お兄ちゃん！

多津子 あんたがそうしたいなら勝手にすれば！

正則 お義母さん！

室内に壮大な音楽が鳴り響く。

多津子 お父さんは？どこ行ったの？
紗江 （あたりを探し）父さーん！
正則 （同じく）お義父さーん！

塀の上部にある球体が煌煌と光る。
多津子の号令とともに、敬礼する一同。

多津子 司令官に敬礼！

皆 ハッ！（ポージング）

司令官 （声）カゾクマン、諸君……こんにちは。
皆 こんにちは！

司令官 （声）ブルーの妻は、いるか？
多津子 いえ。外出しております。

司令官 （声）そうか……。

大輝 あの司令官。詩織が、何か？

司令官 （声）先ほど、フライデーの編集部から連絡があった。
大輝 フライデー？

司令官 （声）ブルーの妻のスクープ記事が、来週のフライデーに載るそうだ。
多津子 スクープって……やっぱり不倫でもしてたんですか？

紗江 嘘でしょ……。
司令官 （声）そうではない。ブルーの妻が不妊治療に通っていたという記事だ。

多津子 不妊治療って……そうなの？大輝。

大輝 ……詩織は同窓会や友達と遊んでいたわけじゃない。ずっと病院に通ってたんだ。

多津子 そんな大事なこと、どうして言わなかったのよ？

大輝 子供が出来ないのは自分の責任だからって……治療費だって安くはない。家の財布は使わずに、自分の貯金切り崩してまで通っていたんだ……。

多津子 それで「パートに行きたい」って……？

大輝 ああ。俺にも相談があった。

司令官 （声）後ほどスクープ写真をそちらに送る。どれを載せるか、選んで

おくように。

大輝

司令官。記事を差し止めるといふことはできないのでしょうか？

司令官

(声) 日本には言論の自由がある。差し止めなど出来ない。

ここへ玄関の引き戸が開く音。

紗江

父さん?!どこ行つてたの?!

父レッドの一郎が居間へと入ってくるなり、

一郎

司令官!先ほどミドラーが出現しました!

司令官

(声) なんだと?!取り逃がしたのか?!

一郎

申し訳ありません!すぐに追いかけたのですが……。

司令官

(声) 直ちに自宅周辺を捜査せよ!カゾクマン、出動!

一郎/多津子/紗江/正則(敬礼し)ハッ!

大輝

……。

球体の明かりが消えて行く……。

多津子

いつなの?ミドラーが出現したのって。

一郎

説明はあとだ。早く着替えなさい。

多津子

そうね。

多津子はスーツを手に寝室へ、紗江は洗面所へ、正則はその場で着替え始める。

大輝は、動かず……。

大輝

……。

正則

お義兄さん、着替えなさいんですか?

大輝

……。

一郎

……もういいよ。正則くん。

正則

……僕、思うんですけどね。カゾクマンは日本の奴隷なんかじゃあり

大輝
ませんよ。

……。

正則
ファミリーの語源だって、奴隷なんかじゃありません。

一郎
でも、司令官補佐は奴隷だって……。

正則
あれは間違いです。ファミリーの語源は……「Father And

Mother I Love You」その頭文字をとって「FAMILY」なんです。

一郎
……なんか、聞いてて恥ずかしい……。

大輝
どうせ、ネットか何かの嘘情報でしょう？

正則
そうです。でもいいじゃありませんか。僕には奴隷なんかよりずっと素敵な意味に思えます。それが嘘の情報だとしても、僕はそっちを信じたい。

……。

大輝
詩織ちゃん、見つかったのか？

一郎
……いいや。

一郎
こっちはいいから詩織ちゃんを探してこい。まだこの辺りをミドラーがうろついている可能性がある。

大輝
……。

大輝は葛藤しつつ、詩織を探しにいかうとする。

するとテレビから突如、砂嵐の音。

着替えて出てくる多津子そして紗江。

多津子
何の音？！

一郎
わからない……テレビが勝手に……。

紗江
一体どうなってるの？！

スポット。

そこには男前男に捕らえられた詩織がいつの間にか登場。

その映像を、テレビを通して見ている一郎たち。

大輝
……詩織？！

一郎 司令官補佐……。

正則 …… S Mがご趣味だったんですか……。

男前男 S Mではありません。申し遅れました。私、怪人、男前男です。

大輝 怪人？！

多津子 男前男？！

紗江 そうでもないのに……。

男前男 ご覧の通り詩織さんを入質にとらせていただきました。詩織さんの命が惜しければ我々の指示に従っていただく。

一郎 指示だと？

男前男 まず、あなたの方手で防衛省を破壊してください。そして朝霞駐屯地の陸上自衛隊も、しらみつぶしにしてみよう。

紗江 そんなこと、あたしたちだけで出来るわけないでしょ！

男前男 カゾクマンロボを発動させればいい！必殺の満月切りがあれば自衛隊なんてイチコロですよ。

正則 カゾクマン、ロボ……。

男前男 そして、目障りな自衛隊を排除したのちに、ミドラー様と真の決着をつけてください。ミドラー様は今、巨大化する準備をされています。

多津子 ミドラーが、巨大化ですって？！

男前男 つまり、あなたの方が詩織さんを救う手段は、自衛隊とミドラー様の両方を倒すこと以外、他にないのです。

大輝 クソツ！

男前男 まあ、ミドラー様があなた方に倒されることは、考えられませんがね。待ってるよ、詩織！今、ロボを発動させるからな！

詩織 大輝さんダメ！それだけは！

大輝 しかし、防衛省を破壊しなければ、お前は……。

詩織 私の命ひとつで地球が救えるなら、私はいくらでも命を捧げます。

大輝 …… 詩織……。

詩織 …… 大輝さん。私は、あなたのお嫁さんで本当に幸せでした……。

大輝 ……。

詩織 お義父さん。跡継ぎを産めなくて、本当にごめんなさい……。

一郎 詩織ちゃん……。

詩織 お義母さん。私は本当にダメな嫁で、お義母さんの期待に応えること

ができず、申し訳なく思っています……。

多津子

……。

詩織

紗江さん。紗江さんにはいつもいつも――

多津子

あのね！詩織ちゃん！

紗江

ちよつと待ってよ。続き聞きたい。

多津子

あたしはね、あなたのそういうところ、本当に嫌い！どうして一人で背負おうとするの?! どうして本音を言わないの?! 文句のひとつも言わないで、どうして悲劇のヒロインぶるの?!

詩織

そんな、悲劇のヒロインだなんて――

多津子

家族っていうのはね、相手のダメなところも、どうしようもないところも、何もかも受け入れて、本音で付き合って行くもんなんじゃないの?! あなたはいつまで経ってもあたしたちの顔色伺って、文句のひとつも、本音のひとつも言わないじゃないの!

詩織

お義母さん……。

多津子

言ってごらんなさいよ！今思ってる、本心を!

詩織

……(しくしくと泣き出して)……怖いです……死にたくありません

……助けてほしいです……。

多津子

それでいい！今、助けに行つてあげるからね!

男前男

ここの居所もわからずに、どうやって助けるおつもりですか?

多津子

そ、それは……。

男前男

それでは四半世紀ぶりのカゾクマンロボ発動を楽しみにしています。

そういい残し、詩織を連れ去って行く男前男。

多津子

どうしよう。詩織ちゃん、助けるなんて言っちゃったけど……。

紗江

……ねえ。モニターの奥に映ってた看板、見た?

多津子

看板?

紗江

あれ、イオンの看板だと思っただけ……。

多津子

ええ?

紗江

おそらく詩織さんは、すぐそのイオンにいる。あたりの暗い感じから想像するに……3階の駐車場……。

大輝

助けに行つてくる。(行こうとする)

正則 ちよつと待つてください。僕が、イオンに行きます。

大輝 正則さんが？

正則 お義兄さんは皆さんと一緒にカゾクマンロボを発動させてください。
しかし……。

大輝 カゾクマンロボは、佐久間家の血縁者でなければ発動できない……。

正則 ……………。

正則 婿養子である僕は、カゾクマンロボに乗り込むことは出来ないんです。だったら僕が、詩織ちゃんを助けに行きます。

紗江 それなら、あたしも付き合おうよ。

正則 いや、僕ひとりで行かせてくれ。

紗江 どうして？！

正則 倫太郎に言われたんだ。「パパの、強い姿が見たい」って。

紗江 ……………。

正則 いじめっ子たちに「パパが強いところを見せつけたい」って。

紗江 ……わかった。テレビ局に電話して、今すぐ中継車出してもらおうから。

正則 頼む。

大輝 正則さん、詩織のことくれぐれもお願いします。

正則 はいっ。

正則は勢いよく部屋を飛び出して行く。

紗江はすぐさま電話をかけて、

紗江

もしもし。MXテレビさんですか。妹イエローです。板橋区徳丸2丁目
目のイオンに怪人が出現しました。中継車をすぐにお願ひします。

(切る)

多津子

(ブルーのヘルメットを差し出し)……大輝。乗ってくれるわよね？

カゾクマンロボに。

大輝 ……当たり前だ！俺は兄ブルーだぞ！

あたりに轟音が鳴り響く。

紗江

え？なに？

一郎 おい！あれを見る！

一郎が塀の向こうを指差す。巨大化するミドラーの映像。

大輝 ……ミドラーが……巨大化していく……。

ミドラー (声) さあ！カゾクマンロボを発動させるのだ！

多津子 ちよっとくらい待てないの？！発動には時間がかかるのよ！

ミドラー (声) さっさとしろ！今すぐ詩織を殺してもいいんだぞ！

大輝 なんだと？！

一郎 挑発に乗るな。正則くんが詩織ちゃんを確保するまで我慢しろ。確保

次第、ロボを一気に発動させる。

大輝 わかった。

多津子 なんせ25年ぶりだから。発動まで、あと30分待つてちようだい。

ミドラー (声) 30分だぞ。それ以上は待てない。

多津子 わかったわ。

一郎 よし、みんな！配置につけ！

皆 おう！

4人は座卓を手にとると、

一郎 テーブル、トルネードアタック！

皆 アタック！（座卓を回し、奥の廊下へ）

一郎 ダイニングテーブル、シャイニング！

皆 シャイニング！（テーブルを回し、奥の廊下へ）

一郎 (トイレからスッポンを取り出し) スッポン、シエアリング！

多津子 (受け取って) スッポン！

大輝 (同じく) スッポン！

紗江 (同じく) スッポン！

一郎 (最後のスッポンを掲げ) スッポン！

カゾクマンたち、散り散りに居間を去る。

照明変化。イオン3階駐車場…。

あたりを警戒しながら、やってくる正則。

正則 ……詩織ちゃん……詩織ちゃん……。

男前男 (声) よくぞ、ここがわかりましたね。

駐車場に男前男が現れる。

正則 出たな！怪人、男前男！

男前男 おひとりですか？正則さん。

正則 お前なんぞ、僕ひとりで十分だ！

男前男 おひとりとは、なかなか勇氣ある行動だ。しかし、あなたに勝ち目はない。

そう言うと男前男は詩織を強引に人質に取る。

正則 詩織ちゃん！！

男前男 いいんですか？私に齒向かうと、詩織さんの命はありませんよ。

正則 クツ……。

詩織 何が「男前男」よ。ほんつつつと格好悪い。

男前男 うるさい！黙れ！

詩織 本当の男前ならね、正々堂々と一対一で勝負しなさいよ！今のあなた

は「男前男」なんかじゃない。「怪人65点男」よ！

男前男 ……詩織さん。あなたのそういうところ、嫌いじゃない。

男前男は詩織を離し、

男前男 いいでしょう。お望み通り正々堂々と勝負します。そのかわり、私が

詩織 勝った暁には……私の女になってもらう。いいですね？

正則 ……いいわ！なってあげる！

詩織 すごい、プレッシャー……。

男前男 お願い、正則さん……。

詩織 さあ！婿グリーン！勝負だ！

バトル風の音楽。

二人の対決が始まる。

戦隊ヒーローそのものの格好良い立ち回り。互いに互角。

男前男

なかなかやりますね。ただのデブではないようだ。

正則

(息切れ) はあ……はあ……はあ……

男前男

しかし、その余計な肉のせいで、あなたのスタミナは限界のようだ。とどめを刺しますよ。

また立ち回る二人。

体力を奪われフラフラの正則。

男前男はとどめを刺しに行く。

男前男

婿グリーン！覚悟！

正則の腹にパンチを食らわせる男前男。

正則

！！

詩織

婿グリーン！

瀕死の正則になぜか息子を想起させる唄を口ずさむ詩織。

正則も僅かに口ずさみ……。

男前男

??

どこからともなく力がみなぎり、復活する正則。

正則

ミュージックスタート！

息を吹き返した正則の必殺技が炸裂する！

男前男

……なぜ……スタミナは限界だったはずなのに……。

バタリと倒れ込む男前男。

正則 あなたに、鍛えていただいたおかげです。

詩織 正則さん！

正則に駆け寄る詩織。

正則は携帯電話を取り出すと、即座に電話する。

正則

もしもしお義父さん！詩織ちゃん確保しました！カゾクマンロボを
発動させてください！

正則は電話を切るとテレビカメラに向かって、

正則

倫太郎！見てるか！パパ、やったよ！

はしやぐ正則。

詩織

正則さん！早くこの縄を解いて！

正則

あ、ごめん……。

紐を解く正則。

幕が降りる。

一郎

(声) カゾクマンロボ、発動！

佐久間家の家屋がトランスフォームする映像。

一軒家がカゾクマンロボとなる。

おどろおどろしい音楽とともに上手の幕が上がる。

巨大化したミドラーの登場(実写)。

ミドラー

おのれ婿グリーン！こうなったら、町中を火の海にしてくれるわ！

ミドラーの口から炎が放たれる。町中が火の海と化す。
ここでセンターの幕が半分あがる。そこにはカゾクマンロボを
操縦する一郎、多津子、大輝、紗江の姿。それぞれスツポンを
手にし一郎が右手、多津子が左手、大輝が右足、紗江が左足を
操縦しているようだ。

一郎　　まずい！急ぐんだ！大輝！紗江！

大輝　　紗江！呼吸を合わせるんだ！

紗江　　OK！行くわよ！せーの！

大輝／紗江　イチニ、イチニ、イチニ、イチニ……。

大輝と紗江はスツポンを交互に動かす。

下手の幕が上がると、「イチニ」「イチニ」の呼吸に合わせて、

カゾクマンロボ（実写）が歩いて登場する。

ミドラー　出たな！カゾクマンロボ！

一郎　　ミドラー！いよいよ決着のときだ！

ミドラー　望むところよ！

多津子　手始めにこれでも食らいなさい！

多津子がスツポンを引く。とロボの左手が上がり、

多津子　アンビリーバブルロケット！

数十発のロケットが発射される（映像）。
それをことごとくはじき返すミドラー。

ミドラー　ちよこざいな。こんなもの屁でもないわ！

多津子　つ、強い……。

ミドラー　これでも食らえ！

ミドラーの手から稲妻が放たれる（映像）。

ダメージを受けるカゾクマンロボ。

皆 うわああああ！

一郎 こうなったら母さん！必殺、満月切りだ！

多津子 了解！行くわよ！お父さん！

一郎 せーの！

一郎と多津子は同時にスッポンをグラインドさせる。

と、一郎の動きが止まって、

大輝 なにしてんだ？！親父！

一郎 う、動かない……久しぶりの発動でロボが錆び付いているようだ。

紗江 なんですって？！

ミドラー フッフッフッ……どうやらカゾクマンの終焉が来たようね。

一郎 くっそー……。

ミドラー さらばだ！カゾクマン！

また稲妻を放とうとするミドラー。

しかし、その腕がふと止まり……。

一郎 (声) 彼女は父親を倒されたショックで、その場にうずくまり、泣き

始めたんです……。

フラッシュバックの映像。

泣いている幼きミドラー。それを見て仕留めずに去る父ブルー。

ミドラー (払拭しようと) さらばだ！カゾクマン！

ミドラーの声を打ち消すように、一郎の声が重なる。

一郎 (声) 彼女の背中を見ていたら、私は彼女を捕らえる気にも、まして

や、仕留める気にもなれなかった……。

ミドラー ……。

幕にミドラーのアップが映し出される。
その目からは大粒の涙がこぼれ落ちる。

多津子 ……ミドラーが……泣いてる……。

紗江 一体、どうなってんの……？

ミドラー レッド……これでイーブンだ。

ミドラーが、その場を立ち去っていく。

一郎 イーブン？一体どういうことだ？おい！待て！ミドラー！！

ここへ遠くから数台のヘリコプターの音。

一郎 あっ、自衛隊……。

ヘリの音がどんどん大きくなっていく。

容暗……。

同日、夕方。すでに雨は止んでいる。
居間には、カゾクマンの格好をした一郎、多津子、大輝、紗江
が打ち拉がれている。

一郎 ……………。

多津子 ……………。

大輝 ……………。

紗江 ……………。

多津子 大輝。もうヤフォーニュースに載ってる？

大輝 (スマホを見て) ……ああ。

多津子 なんて？

大輝 「カゾクマンロボ 久々発動も役に立たず」

多津子 ……そう。

大輝 もうひとつあるよ。

多津子 ええ?! もうひとつ?!

大輝 「総理明言 カゾクマンには世代交代が必要」

多津子 総理が？

大輝 ああ…………。

一郎 ……………。

多津子 ……………。

紗江 ねえ。ウチの人のニュースは？怪人倒したっていうのに。

大輝 (確認し) ……載ってない。

紗江 ほんと勝手よね。活躍した方のニュースは載せないなんて。

大輝 マスコミなんて、そんなもんだろ。

ここへ玄関の引き戸が開く音。

グリーンの格好をした正則と詩織が帰ってくる。

大輝 大丈夫か？精密検査受けてきたんだろ？

詩織 うん。どこにも、異常はないって。

大輝 そうか…………よかった…………。

詩織は皆に座礼して、

詩織 すみません。ご迷惑おかけしました。私がさらわれたばかりに……。
一郎 お互い様だよ。俺たちも、司令官補佐が怪人だっけ見抜けなかったんだから。

詩織 ……。
一郎 それにミドラーを倒すチャンスだったのに、俺たちはそれを逃したんだよ。

一郎は赤いヘルメットを取ると、大輝に差し出して、

一郎 大輝。あとは頼む。

大輝 ……。

多津子 いいの？お父さん。

一郎 仕方がない。総理大臣もそう言ってるんだ。

多津子 お父さんの手で、ミドラーと決着つけるんじゃないの？

一郎 俺だってそうしたいよ。でももう、この身体じゃ無理だ。

多津子 ……わかった。

多津子はヘルメットを取ると、詩織に差し出して、

多津子 詩織ちゃん。あと、お願いね。

詩織 ……それは、受け取れません。

多津子 えっ……。

詩織 お腹に、赤ちゃんが出来たんです。

多津子 ……ほんとに？！

詩織 はい。さつき、病院で。

多津子 (涙ぐみ) よかった……おめでどう。

詩織 ありがとうございます。

抱き合う多津子と詩織。

喜ぶ一同。

大輝 親父。俺もそれは受け取れないよ。

喜び勇む空気が、一瞬凍る。

一郎 ……どうして？

大輝 やっぱり俺は、倫太郎にも、産まれてくる赤ん坊にも、カジクマンを

継がせたくない。俺たちの代で、ミドラーとは決着をつけよう！

一郎 そうだな。

多津子 よし！じゃあ今晚はお赤飯でも炊こうか！

正則 あーいいですねえ！

詩織 でもお義母さん。今夜のおかずはおでんですよ。

多津子 ええ？！またあ？！

詩織 大根まだ残ってるんです。あんなにいっぱい買ってくるから。

多津子 だって一本20円よ？そんなチャンス滅多にないもの。

詩織 だからって買い過ぎです！料理作るこっちの身にもなってくださ

い！

大輝 おい、詩織……？

多津子 ……あのね！それがあなたの仕事でしょ？！大根使い切りしたいなら、

おでん以外のメニュー考えなさいよ！

詩織 (慌てて頭を下げ) すみません！お義母さんのおっしゃる通りです。

多津子 詩織ちゃん……そこで怯んじゃダメよ。もつと言い返してこないと。

詩織 (少し笑って) はい、今度からそうします。

多津子 そうしなさい。

詩織は台所へ。

切ないエンディングテーマが流れる。

上手の幕が下がり、歌詞が映し出される。

歌

家族には 言えない 悩みがある

家族には 言えない 隠し事がある

静かにヘルメットを置く一郎。

歌 父レッドの腰痛の原因はゴルフの練習で痛めたもの

一郎が寝室へ去って行く。
ヘルメットを置いて、立ち上がる多津子。

歌 母ピンクが買った化粧品ねずみ講に騙されていたこと

多津子が寝室へ去って行く。
大輝はヘルメットを置くと、足を引き摺りながら、

歌 兄ブルーは最近のやけ酒で痛風の気配が否めない

大輝が2階へと去って行く。
正則はヘルメットを座卓に置いて、トイレへ。

歌 婿グリーンはずっと疑っている先生と紗江の不倫を

紗江に視線を向けながらトイレの扉が閉まる。
静かにヘルメットを置く紗江。

歌 妹イエローの息子倫太郎は正則の子供じゃないのかも

紗江が切なそうに2階へと去っていく。
誰もいなくなる室内に5人のヘルメットが残される……。

歌 ああバレてしまうのが恐ろしい

ああ怖くて今夜も眠れない

ああ世襲戦隊カゾクマン

ああ世襲戦隊カゾクマン

居間が夕日に染まっていく。
容暗……。

N 次回の世襲戦隊カゾクマンは？！

オープニング曲の、アレンジバージョンが流れる。
明転すると居間の中央で赤子をあやしている詩織。

N 産まれたばかりの赤子をあやしている詩織。

玄関からミドラーが現れ、強引に赤子を奪っていく。

N すると突如現れたミドラーに赤子を連れ去られてしまう。

庭にスポット。そこには男前男の姿。

N 一方、ミドラーの手により復活した男前男。詩織のことが忘れられず、
途方にくれていた。

庭からミドラーが赤子をあやしながらやってくる。

N ミドラーは赤子を人質に取るどころか、その可愛さあまり「赤子を育
てる」と言い始めてしまう。

居間では、ショックのあまり泣いている詩織。インターホンが
鳴ったのか、玄関に向かうと驚きの表情を見せる。

N 打ち拉がれる詩織の前に現れたのは……あの介護認定が下りていた
先代のグリーンだった！

幕が降りると、タイトルテロップが映し出される。

N 次回世襲戦隊カゾクマン！

「グリーンが二人？！ミドラーの母性がカゾクマンを狂わす！！」
乞うご期待！

オープニング曲が流れる。
ゆっくりと5枚の幕が上がると、そこにはカゾクマンの姿。

レッド 父レッド！
ピンク 母ピンク！
ブルー 兄ブルー！
イエロー 妹イエロー！
グリーン 婿グリーン！
レッド 五人揃って！
皆 カゾクマン！

決めポーズをし、終幕。

おしまい